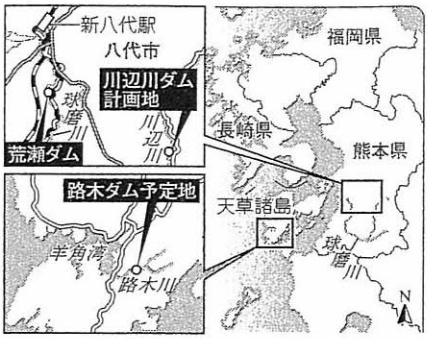
国の川辺川ダム阻止　熊本

蒲島知事 その後の「決断」

熊本県民を四十二年間対立させてきた国の川辺川ダム計画にノーを突き付け一躍、全国的な評価を高めた蒲島郁夫知事(六一)。しかし、地元の評判はいまひとつ。全国初となるはずだった県営ダムの撤去を中止し、必要性に大きな疑問符が付く別の県営ダム建設も推進しているためだ。同じダムで、なぜこんなにも対応が違うのか。現地を訪ねた。

（関口克己）



荒瀬 ■「撤去費高い」と一転存続

熊本県南部を流れる日本三大急流の一つ・球磨川。川辺川などの水を集め、八代海に注ぐ。その下流、八代市に威容を構えるのが荒瀬ダムだ。

一九五五年から水力発電ダムとして稼働し、高さ二十五㍍、最大出力は一万八千二百㌔。二〇〇二年、当時の潮谷義子知事(六九)は老朽化などを理由に撤去を決め、来年には撤去が始まる予定だった。だが昨年四月、蒲島知事が就任すると事態は一変。六月に撤去を凍結、十一月には存続が決まった。撤去費用が捻出できないというのだ。

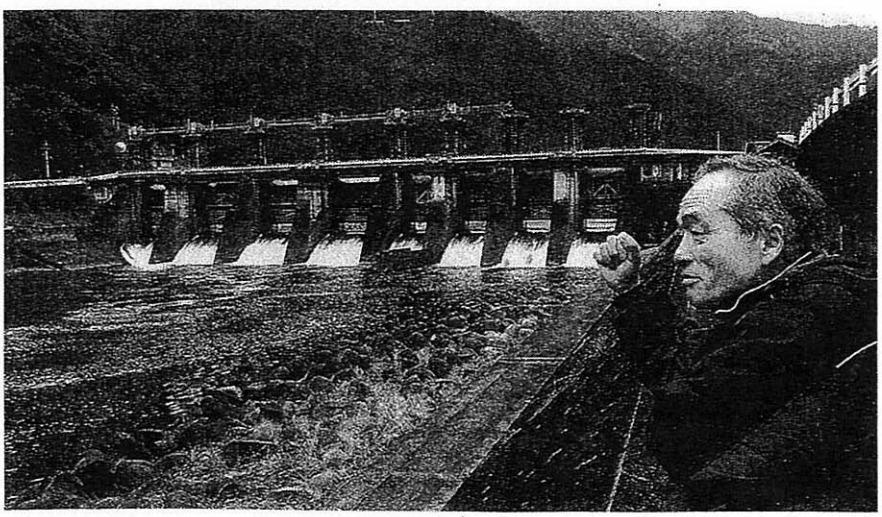
「知事は球磨川が大事なのか、カネが大事なのか。よう分からん」

同市に住む球磨川漁協総代の平山信夫さん(六〇)はダムを憎々しげに見ながら訴えた。「アユはいないし、ウナギはダム完成前の一万分の一。オレの年齢だと、かつてのようにアユや青ノリもたくさんとれるようにしてもらうには、一日も無駄にしてほしくないんよ」

蒲島知事は昨年九月、県議会で「球磨川そのものがかけがえのない財産であり、守るべき宝」と川辺川ダムに反対を表明した。ダムによらない治水対策を追求するよう国に求め、県民の多くを感動させた。ところが、その知事が荒瀬ダム存続を決めると、県民の高い評価は落胆に変わった。

問題の撤去費用は当初六十億円と見込まれたが、県は六月に七十二億円、十一月には九十一億円になることが判明したと発表した。工期が五年から六年に延びたり、護岸の安全確保に追加対策が必要となったりしたのが主な要因だという。

一方、発電設備の更新を含め改修・存続費用は八十七億円。撤去と大差ないが、県の実質負担額は十六億円と少ない。存続すれば、発電した電力をこれからも毎年一億円程度で九州電力に売れる見通しのためだ。県には内部留保金があるが、撤去には三十一億円しか充てられないという。



撤去されるはずだった荒瀬ダム。長年、球磨川とともに生きてきた平山信夫さんは蒲島知事の存続判断に困惑を隠せない＝熊本県八代市で

住民落胆「球磨川は宝」本心か

蒲島知事は「荒瀬ダム撤去を求める民意」に配慮しつつ、「財政再建団体への転落は絶対避けなければならないという大きな民意がある」として、県財政への影響が少ない存続を選んだ。

だが、撤去方針が決まったのは七年前。昨年二度も費用が増えたことに、県企業局は「積算漏れがあった。県民への説明不足は認める」と釈明するが、平山さんは疑念がぬぐえない。

「ダムがなくなれば、ダムを管理する職員は不要になる。彼らは理屈を並べて費用をつり上げて県民をあきらめさせたいのでは？　知事もこれを信じちゃったのかも」

「美しい球磨川を守る市民の会」代表の出水晃さん(六四)も知事の姿勢を批判する。「知事は予算はゼロベースで見直すと公言し、同じ流域の川辺川ダムにも反対するのにどうして荒瀬ダムは存続なのか。『球磨川は宝』が本心なら、〝あのダム〟の費用で撤去せえ」

県営ならダムOK？

地元不要論でも推進・路木

県営ダムをめぐる対立は、八代海をはさんだ隠れキリシタンの受難の歴史を刻む天草諸島にもあった。

県が一九九三年、二級河川・路木川河口の上流約三キロに計画した路木ダムだ。高さ五十三メートル、総貯水量二百二十九万立方メートル。天草市南部の旧牛深市と旧河浦町地区の水道用水確保と、河口の路木地区の洪水対策が目的。

総事業費は九十億円、うち市負担が約十五億円。付け替え道路はほぼ完成し、新年度に本体を着工し、完成は二〇一三年度の予定だ。

県は〇一年、路木川河川整備計画を作成。「一九八二年七月などの豪雨で洪水が発生し、路木地区に約百棟の床上浸水」と記述、三十年に一度の洪水に対応するためにもダムが必要とする。

だが、この記述は虚偽の疑いが濃厚だ。地元の市民団体「路木ダムを考える河浦住民の会」が昨年十一月、路木地区の全五十九世帯に家屋の浸水被害の有無を調査したところ、全世帯が「被害なし」と答えたのだ。

県河川課は「整備計画を作る際、旧河浦町に問い合わせた。実際に浸水被害があったかどうかは県に記録はないし、天草市も資料を廃棄して不明だ」と説明。「記述はダム建設のきっかけではあるが、根拠ではない。あくまでも三十年に一度の洪水対策が目的」と建設推進の必要性を強調する。

「羊角湾を守るためにも、路木ダムは不要」と訴える植村振作さん

治水効果疑問「海の生態系も崩す」

計画から十年を経ても継続中のため、県公共事業再評価監視委員会は昨年秋、建設の是非を審議したが、結果は「継続」。推進を貫く天草市に配慮した形だ。

路木地区に住む小川篤さん(七〇)は、自宅横の高さ三メートルほどの堤防で言い切った。「大潮の満潮と大雨が重なっても、水位はせいぜい堤防の半分。ここで七十年生きちょるけど、危険を感じたことはなか。ダムはいらん」

水道用水についても地元の環境団体「天草の海を考える会」の植村振作代表(七三)は「近くには取水設備を備える砂防ダムなどもあるが、その水は使われていない。天草では水は余っているし、今後は人口も減る」と話し、必要性を疑問視する。

路木川は小さく、この清流が行き着くのが羊角湾だ。アマモの群生地の南限で、干満の差が激しい干潟は魚介類の産卵と稚魚の成長に適し、ビョウブガイなどの絶滅危惧種が多数生息する。

この豊かな湾は長年、干拓事業計画で苦しんできた歴史がある。

国は六九年、湾を長さ四百三十三メートルの堤防で閉め切って淡水化し、百四十ヘクタールの農地造成を始めた。しかし、農地への入植希望者がほとんどなく、九七年に中止。着工後は人口も減る」と話し

自宅横を流れる路木川の堤防を指し示し、「床上浸水被害などない」と話す小川篤さん＝いずれも熊本県天草市で

「建設費90億円を『荒瀬』撤去に」

国の大型公共事業との対峙（たいじ）で勇気を奮った蒲島知事。東大教授から転身したが「灯台下暗し」とはジョークにもならない。足元の県営ダムでは首をかしげる。路木川は夏、水ガキたちが遊ぶ自然豊かな清流だという。天草の宝を守り、球磨川を蘇生（そせい）させることに翻意を促したい。（呂）

デスク／メモ

後としては全国初の干拓事業中止として話題になった。その後、県は約七十ヘクタールを埋め立てて多目的広場などを造る地域振興策を浮上させたが、二〇〇五年に中止になった。

国が堤防建設予定地に数多く残した捨て石は、干潮時に姿を見せるなど潮流を遮り、水質を悪化させている。湾内で漁業をする木浦秀豊さん(六一)は「干拓事業で長年苦しまされ、お次はダム。豊かな養分を含む川砂をせき止め、海の生態系を崩す。羊角湾を荒らすのはいいかげんにしてくれ」。

湾内で真珠養殖業を営む松本基督さん(五三)は、蒲島知事に決断をこう迫った。「路木ダムが不要なのは明らか。その建設費用を、荒瀬ダムの撤去に充てるべきだ」